歴史探訪

|第15回|

四国の覇者 長宗我部 元親

土佐統一 ―姫若子から鬼若子へ―

▲長宗我部元親立像

1 元親生誕以前の土佐の情勢

長宗我部氏は長岡郡の岡豊城（高知市の北東、南国市）を本拠にしていた。同家が土佐で勢力を伸すことができたのは、当時土佐の守護大名細川氏に近い国衆であったため、その細川氏の後ろ盾があったからであった（詳細は、REPORT2016年160号を参照）。この時期、京都では「応仁の乱」が勃発していた。

細川本家に任されて土佐を支配していた分家の守護代細川勝益は、細川本家支援のため京都に進軍したが、彼は京都で病死してしまう。これにより細川氏の土佐での求心力は急速に低下していった。細川氏を後ろ盾に勢力を伸ばしてきた長宗我部氏にとっては大きな痛手となった。他の国衆はこの機に乗じて長宗我部

土佐七雄

- 本山氏―長岡郡5000貫を支配。
  当主 本山梅慶
- 吉良氏―吾川郡5000貫を支配。
  当主 吉良親貞
- 安芸氏―安芸郡5000貫を支配。
  当主 安芸国虎
- 津野氏―高岡郡5000貫を支配。
  当主 津野親忠
- 香宗我部氏―香美郡4000貫を支配。
  当主 香宗我部親泰
- 大平氏―高岡、土佐郡4000貫を支配。
  当主 大平元国
- 長宗我部氏―長岡郡3000貫を支配。
  当主 長宗我部国親

を潰そうと一斉に蜂起したのである。特に、同じ長岡郡の北の山岳地帯を支配していた本山氏などは、支配地の国境が接しており以前より平坦で肥沃な高知盆地に進出を狙っていた。

1508年、本山氏の当主本山梅慶はこの機に長宗我部兼序（元親の祖父）を「虎の威を借りる野狐め」と侮り、近隣の国衆、山田氏、吉良氏、大平氏等と計り岡豊城を急襲した。長宗我部兼序は細川氏の援護を受けられず是非もなく落城自刃した。その後、長宗我部氏の領土は本山氏、山田氏、吉良氏、大平氏によって分割されてしまい、長宗我部氏は一旦領土を失うのである。このとき、長宗我部氏には千雄丸6歳（元親の父親、後の国親）がいた。

兼序は千雄丸を以前より親密にしていた土佐の国司で幡多郡を支配している土佐一条家に密かに逃がし、長宗我部氏の血脈を存続させた。

この一条家は、そもそも一条教房（1423～1480）の代に京都で関白の地位にあった。しかし、応仁の乱が勃発すると教房は細川勝元と山名宗全の権力争いを嫌い、一条家の荘園があった土佐の幡多中村荘に移住した。ここに公家大名土佐一条家が誕生した。この教房に当時いろいろと協力し合力したのが、16代長宗我部文兼であった。

この恩義を忘れない2代当主房家は、長宗我部氏の現状を憐れに思い、千雄丸を引き取り元服するまで育て上げた。一条家の家格は摂関家にあたり、幡多郡を中心に広大な荘園（1万5千貫）を領有していたため、土佐の国衆も一条家には土佐の盟主として逆らえない力関係にあったのである。

一条房家は、以前父教房が受けた長宗我部氏からの恩義を忘れずこの千雄丸を元服まで育て上げ、「長宗我部国親」の名付親にもなっている。

図表1 土佐の国人勢力状況

出所:津野倫名「長宗我部元親と四国」吉川弘文館、他資料より筆者にて作成

四国の覇者　長宗我部 元親

土佐統一 ―姫若子から鬼若子へ―

そして、長宗我部の名跡を復権させ領土を返還するよう、土佐の国司かつ国衆の盟主として平和裏に本山氏、大平氏、山田氏に働きかけた。千雄丸改め国親が元服した時を見計らって、長宗我部の旧領を国衆たちに返還させたのである。

また、一条房家は政略結婚ではあるが長宗我部国親の長女を本山梅慶の長子茂辰に嫁がせ、姻戚関係を結ぶことにより土佐の平和を保とうとした。しかし、この婚姻が後々になって災いになろうとは誰もこの時は予想していなかった。

一方、本州の政情は混迷を極めつつあり、それに四国も後々巻き込まれる運命にあった。尾張国桶狭間において、織田信長の急襲によって今川義元が討ち取られた事もこの時代の情勢を表わす出来事の一つである（1560）。この時期より全国的に下剋上が巻き起こり政情不安定な群雄割拠の時代に突入してゆくことになる。

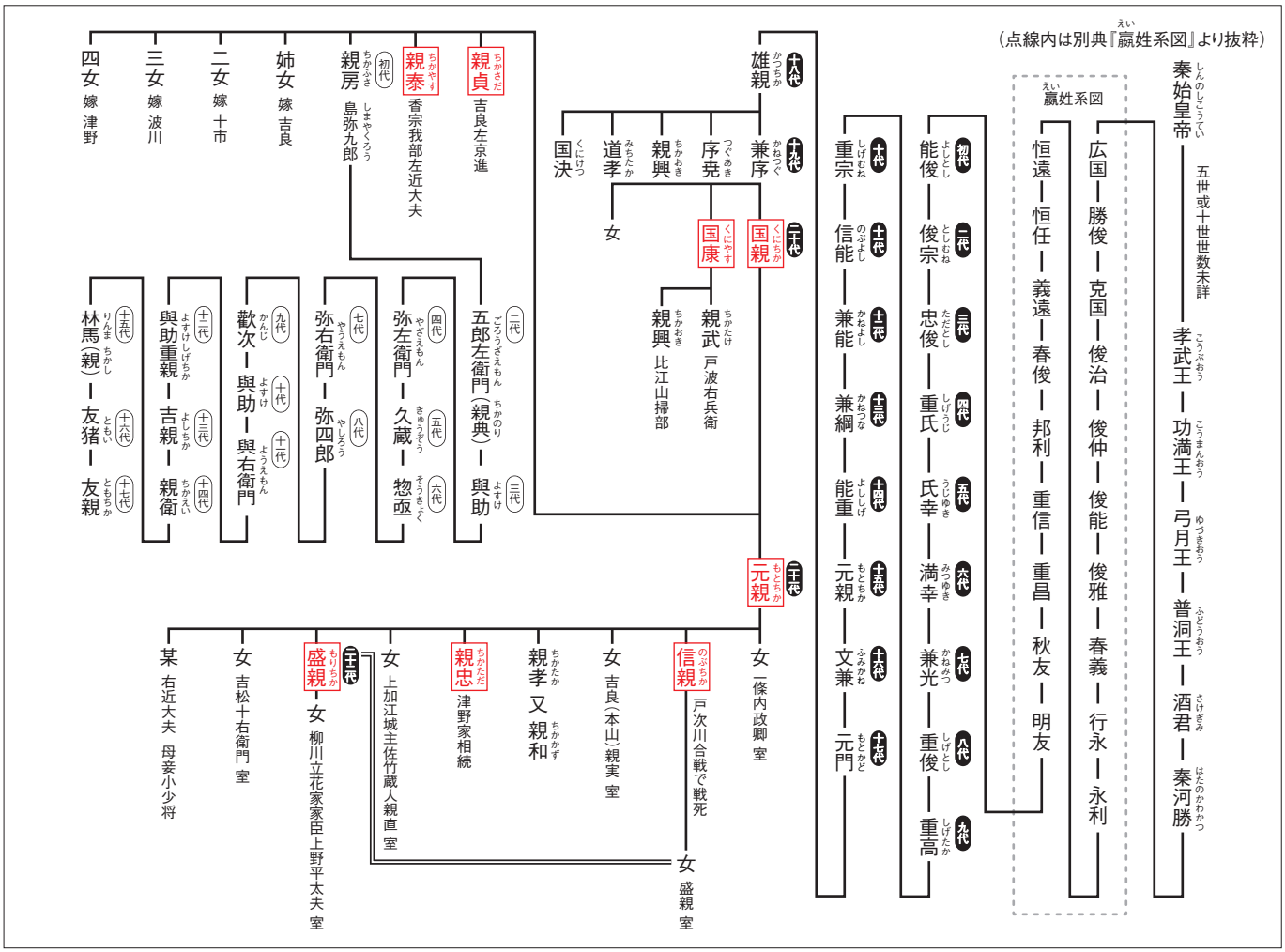
1518年、一条房家のおかげで元の岡豊城に復権できた第20代当主、長宗我部国親は国力と戦力、経済力を養うため、身分の上下に関わりなく能力ある者を登用した。そして国親は次第に戦国大名としての実力を養っていった。1539年、このような情況下で元親が誕生し成長してゆくのである。

2 姫若子から鬼若子へ

天文8年（1539）2代一条房家が亡くなった。その後、一条家には不運な出来事が相次いだ。

3代房冬は2年後病没。4代房基は暗殺され一条家の土佐の盟主としての地位は崩れかかっていった。

図表2　長宗我部氏系図



出所:長宗我部友親著「長宗我部」参考に筆者作成

このように変化する時代の中で、長宗我部元親が土佐統一を成し遂げてゆくのである。

元親の初陣（1561年）の少し前のうららかな日和に元親は鷹狩りに出かけた。

土佐岡豊城主長宗我部国親の嫡男元親は、馬を巧みにあやつりながら浦戸に幾たびか出向いていた。護衛としていつも傅役牧田小十郎が付き添っていた。

「若。馬の扱いよくぞここまで上達なさいましたな」

と満足げに言った。

「これもそなたのおかげじゃ」

と元親は振り向いて小十郎に笑顔を投げかけた。

幼少の頃の元親は無口で顔色も悪く荒っぽいことを嫌い、館の奥で書物を読み耽る姫のようにおとなしい子であった。そこで家臣たちは元親のことを陰では「姫若子」と蔑み戦国大名の嫡子としてこの乱世を乗り切れるかどうかという不安な思惑を皆がいだいていた。

そこで、父国親はこの乱世を乗り切れる跡取り息子に育て上げるため、土佐随一の猛者といわれた傅役をつけたのである。その名を牧田小十郎と言った。彼は大男で、戦さにおいて勇猛果敢に戦い、知略、軍略、兵法の知識も備わった男であった。父国親はこの男の器量を見込んで傅役にしたのである。

牧田小十郎は、元親を戦国時代を戦国大名として生き抜ける武将にするため昼夜を問わず鍛えあげた。元親も戦国乱世を乗り切るため武芸全般を学び、強靭な精神と肉体を身に付けるため小十郎の指南のもと辛抱強く耐え抜いた。かくしてひとかどの戦国大名に成長していったのである。

5月のある日、元親は浦戸に鷹狩りに出掛けた。これは領内の偵察も兼ねてのことであった。元親は桂浜辺りで突然に馬を止めた。

「小十郎、なにかおかしいとは思わぬか」

突然の元親の問いに小十郎も五感を鋭く働かせた。

「海岸沿いに大量の舟の上陸跡、焚き火跡がございます。隣国の本山茂辰配下の兵が偵察に来ていたかも知れませぬ。近くの民家に確かめて参ります。若はここでお待ちくだされ」

と言って小十郎は下の集落に向かって下って行った。

四半時もしただろうか小十郎が帰ってきた。

「若、大変でございます。若のおっしゃられた通り三日ほど前に本山の兵らしきものがここから上陸の上、辺りをくまなく偵察していったと部落の者が言っております。すぐにお父上に申し上げて戦さの準備を急がねばなりませぬ」

「やはりそうか、すぐ岡豊城に戻ろう」

さっそくその夜、当主国親は重臣を岡豊城に集め軍議を開いた。

宿将福富右馬掾は、

「ここは、先手必勝でござりますぞ。本山茂辰は近いうちに必ず長宗我部の領内に侵入して来るでしょう。わっぱ（諜報忍者根来衆）の情報では、すでに茂辰は兵2千を連れて朝倉城を出て支城である潮江城に向かっているとの情報もございます」

小十郎は、

「おそらく長浜城辺りが合戦地となるでしょう。早急に我が前衛の城、種崎城に兵糧、弾薬を運ばねばなりません」

国親は、

「ここはすぐ合戦の準備をせねばならぬ。ところで当方はどのぐらいの兵力が集まりそうか」

「急なことゆえ本山茂辰勢の半分の一千程かと思われます」

と福富は答えた。

「では、敵の半分の兵力で勝利するためにはいかに戦ったらよいか」

との国親の問いに宿将たちは沈黙した。

「ここは、まともに戦ったのでは勝ち目はなかろう」

と国親が言った。

元親の実弟の親貞が口火を切った。

「父上、奇襲しかありますまい。この親貞に先陣を仰せ下されませ」

と願い出たのである。この親貞は元親とは違い、幼き頃より無鉄砲な悪餓鬼で家臣を剣や槍で倒すことが大好きな男であった。武勇も優れており初陣は元親より早く済ましていた。当時の初陣は15歳前後で経験するのが一般的であるが、22歳になっても元親には初陣は許されなかった。家臣の多くは長宗我部の跡継ぎはこの二男の親貞がふさわしく、彼こそこの乱世に長宗我部が生き残れる素質を持った者と診ていた。

この時、前線の種崎城の宿将久武親信が馬を走らせてやってきた。親信は国親の信頼の深い若き武将である。

「殿、前線部隊の準備は我が家臣でもって今備えさせております。その数二百でござります。けれどこの兵力では到底本山勢には敵いませぬゆえ、殿のご出馬をお願い申し上げ奉ります」

この時である。元親が父国親の前に進み出た。

「父上、それがしに先陣をお命じください」

居並ぶ宿将達からどよめきが起こった。通常どの戦国大名の嫡男も初陣は形式ばかりで、決して危険なところに布陣しないものであった。いつも元親を姫若子と蔑んでいた江村親家備後は、

「若、お気持はわかり申しますが先陣は危険過ぎます。お止め下され」

と主張した。そこへ、傅役の牧田小十郎が前に進み出て、

「それがしも若に付いて指揮を執ります。なにとぞ初陣かつ先陣のお役目お許しのほどをこの小十郎からもお願い奉ります」

と懇願した。国親はためらった。居並ぶ諸将もためらいを隠せなかった。皆に姫若子といわれた元親である。日頃の元親をみればとても無理であることは明白に思われた。しかし、元親と牧田小十郎、二人の目はまさに龍神のごとくに燃えていた。

国親は弟国康に目をやった。国康は覚悟を決めた顔でゆっくりと首を縦に振った。伯父にあたる国康は、元親の成長ぶりを傅役の小十郎から逐一聞き及んでいたのである。また父国親も長宗我部の嫡男として、この元親が乱世を勝ち抜く器量があるかを見極めたくなった。

「わかった牧田、元親のこと頼んだぞ」

と国親は初陣にもかかわらず先陣を許したのである。宿将達からはどよめきが起こった。異議を唱える宿将も多数あったが国親は一蹴した。

小十郎としても、跡取りの元親に危険極まりない先陣をさせるのは、確かに清水の舞台から飛び降りるに等しい無謀と言われても仕方がない行為であることは承知していた。しかし、小十郎には勝算があった。

小十郎は元親の傅役になった頃より一領具足隊という元親直属の親衛隊の組織の結成を目論み実行していたのである。この一領具足隊は、気力、胆力、共に備わり武芸に秀でる可能性のある18から25歳前後までの若者から小十郎が自ら選抜し、士分、農民に関係なく組織した者たちで構成されていた。

彼らの大半は家では次男坊以下のタダ飯食い扱いをされていた。小十郎は、そんな彼らを集めて、武芸、兵法等の鍛錬と教練を受けさせた。この数は少しずつ増え、戸の本合戦の頃には少なくとも200名程の精鋭部隊に成長していた。この一領具足隊が、まさに今後長宗我部元親の四国制覇の基幹精鋭部隊となり、彼らは元親の手足のごとく働き活躍してゆくのである。その後、長曽我部の部隊が拡大した際には、彼ら一人ひとりが長宗我部部隊の侍大将として自ら冷静な判断のできる指揮官の任を果たし、強靭な長宗我部軍団を形成してゆくのである。このすぐれた手勢こそが長宗我部元親の強みであった。

3 戸の本合戦

5月27日午前8時頃、戦端の火蓋が切られた。長浜城に移動する本山勢の右翼に密かに布陣した長宗我部の江村、池添、浜田、一円隊は敵の隊列のど真ん中に突如奇襲攻撃を掛けた。

元親の実弟の親貞も右翼の先陣として勇敢に戦った。二倍半の軍勢を繰り出した本山勢に対し、長宗我部勢の右翼隊は決死の覚悟で奮戦し攪乱させた。軍勢の数では劣る長宗我部であったが、この奇襲攻撃に陣形の取れない本山勢は混乱した。けれどもはじめは長宗我部隊の奇襲攻撃が効を奏して優勢であったが、軍の兵力に勝る本山勢は、次第に陣形を立て直し次々に新手を繰り出してきた。

左翼隊の先陣を任された元親は、右翼隊の奮戦ぶりを見て自らの親衛隊である一領具足隊の投入を早くと小十郎に催促したが、小十郎は逸る元親を制し戦況と突入の時機をじっくりと窺っていた。

一刻（約2時間）ほどして、本山勢の陣形の乱れが見えだした。小十郎はこの時を待っていたのである。

「若、今こそ突入の時でござります」

と進言した。元親は、

「攻撃開始、敵を殲滅せよ」

と下知。自ら先頭になって馬を敵本陣に突進させた。敵は華麗な彩りの甲冑をつけた元親に従って疾走する軍団を見て恐れをなし、逃げ出すものが続出した。一領具足隊は、

「皆の者、若に遅れるな」
と叫びながら一団となって敵の正面にくさび形の陣形で突入した。

この特攻は鍛え上げられた精鋭部隊だけあって熾烈なものであった。これにより敵の侍大将宇賀平兵衛をはじめ、剛の者と言われた武将が次々と討ちとられていった。この左翼隊の戦いに右翼の各部隊も加わり、一気に勝敗が決したのである。長浜城主大窪美作守も討死し、もはや敵は敗走するしかなくなっていた。敵の総大将、本山茂辰も命からがら朝倉城へ逃げ帰ったのである。

この戦さの次第は、土佐の他の国衆にも知れ渡った。もう、元親を姫若子と侮るものは家中にも、他の国衆にもいなくなっていた。この戦さにより本山氏の勢力も威厳も急速に崩壊へと向かっていった。そして本山氏は先祖伝来の本拠地である四国の山奥の本山城に撤退せざるをえなくなった。

この情勢をみて他の土佐の国衆は自らのお家安泰のため、長宗我部に投降する者が続いた。ついには、長宗我部氏に対抗する国衆は安芸国虎と一条兼定以外に存在しなくなっていた。土佐の中央部はすでに長宗我部の領土となった。

これは、長宗我部に敵対していた国衆でも、降伏した者は咎めず本領安堵したからである。各国衆はお家安泰のため元親の軍門に下りその家臣団に組み込まれていった。この温情あふれる処置により、長宗我部氏は見る見るうちに強大な戦闘集団に成長していったのである。

話を戻す。戸の本合戦の時、元親の弟親貞は父である国親に一気に朝倉城に籠る宿敵本山茂辰を倒し本山氏を滅亡させる好機であると進言した。しかし、国親は迷っていた。
「父上、手ぬるいのではございませんか。ここで総攻撃をかけるべきです」
と執拗に総攻撃を主張した。しかし、国親は政略結婚とはいえ本山茂辰に我が娘、一ノ姫を嫁がせている。それに外孫にあたる親茂も生まれていた。国親は、長宗我部を一時滅亡させた宿敵本山氏を殲滅するのは今しかないと理屈ではわかっていた。しかし、国親はどうしても我が娘と孫を殺せなかった。国親は決断した。

図表3 戸の本合戦時の長宗我部・本山の勢力図

出所:各種資料参考のうえ筆者作成

「全軍撤退せよ」
と命じた。意外な命令に譜代の宿将たちは理解に苦しんだ。
「殿、本山氏に今までどれほどの辛酸を舐めさせられたかお忘れか」
と譜代の宿将なればこその偽ざる気持ちをぶつけてきた。しかし、元親だけは父国親の断腸たる思いを理解できていた。元親は譜代の宿将たちを集め、父国親の心情を察してくれるよう頼みこんだのである。宿将たちも一番手柄の元親に誠意をもって頼まれれば、返す言葉は無かった。
「全軍撤退」がこれで決まった。

その後、本山茂辰は山々に囲まれた本来の居城瓜生野に後退していった。そしてその後、しばらくは平穏な時間が過ぎた。

1560年、父国親が亡くなり、元親が長宗我部の当主になっていた。そこへ牧田小十郎が飛び込んできた。
「殿、本山茂辰殿が死んだそうです」
元親は、
「近年本山方はおとなしいと思っていたが、城兵たちの士気を考え秘匿し喪に服していたのであろう」
と小十郎に言った。小十郎はすかさず、
「殿、本山の姉君様は長宗我部の身内でございます。また、今瓜生野の砦を守っている親茂殿は甥に当たられます。ここは、殿が姉君様と親茂殿に降伏されるよう密書を送り説得なさいませ。無用な戦さは避けねばなりませぬ」
と進言した。
「わしもそう思う」
と元親は同意した。

元親は実の姉と甥の親茂に使者を発て、根気よく説得に努めた。本山方も強行派の家臣の離反が相次いだことで和議を申し出てきた。1568年の冬のことであった。元親は長宗我部の宿将たちを説得させ、姉をはじめ親茂、次男の内記等々、本山茂辰の子ら甥三名姪二名を岡豊城に引き取ったのである。ここに本山氏は滅亡した。

元親は姉に、
「この差配は、亡き父のご遺言にございます。姉君には長い間、両家の間に立ち、さぞお辛い思いをされたことと思います。これからは実家であるこの長宗我部家で安心してお暮しいただきとうございます」
姉の一ノ姫は涙を浮かべ元親に感謝した。
「親茂、これからはこの元親に力を貸してくれぬか。頼む」
親茂は、
「叔父上、このような乱世にこのような寛大なご差配をいただきありがとうございました。これからは長宗我部の家臣となって働きますゆえ、何なりと仰せ下されませ」
と言って涙した。

4 長宗我部元親と徳川家光の乳母「春日局」は姻戚関係

話は逸れるが、一つ興味深い話がある。

長宗我部元親の正妻は、本能寺の変を起こした明智光秀の筆頭家老斉藤利三の異父妹である。春日局からすれば伯母にあたるのである（図表4）。父の斉藤利三の家柄は斉藤道三の主家筋にあたり、室町幕府内で奉公衆を務めた名家である。美濃の土岐氏の血筋であり、利三の母（正室）は室町幕府の重臣、蜷川氏の娘である。この正室の嫡男が利三である。

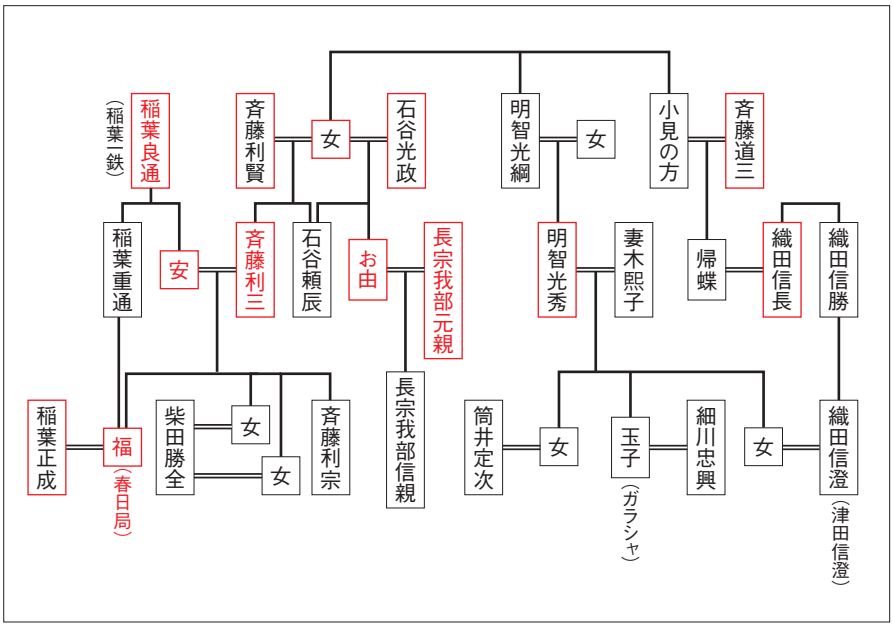
その後、利三の父である利賢は訳あって蜷川氏から輿入れした母親と離縁した。この母は同じく室町幕府の奉公衆である石谷兵部大輔光政の家に再嫁した。この時名門石谷家には男子の嫡子が居なかったので、斉藤利三の実兄が石谷家に養子として入り、石谷頼辰となった。この石谷光政との間に生まれたのが長宗我部元親の正室お由である。斉藤利三にとっては異父妹に当たる。

その後斉藤利三は、美濃の曽根城主、稲葉一鉄の娘お安を妻に娶った。このお安の子お福が、後に徳川家光の乳母となり「春日局」として天下を轟かすほどの権勢を誇った女性である。

ここで、（図表4）をよく見てもらいたい。「春日局」の伯母が長宗我部元親の正室であるという事実である。

明智光秀が羽柴（豊臣）秀吉に山崎の合戦で敗北した時、斉藤利三は捕まり磔の刑にされた。利三は自分が捕われる前に密かに家臣に命じて、娘お福（後の春日局。当時4歳）を異父妹お由が正室として嫁している長宗我部元親に託したのである。史実では、明智光秀が羽柴秀吉と山崎で合戦に及んだ時、長宗我部元親は明智光秀に合力すべく淡路島まで出陣していたが、山崎の合戦で元親

図表4 明智氏・斉藤氏略系図



出所:各種資料参考のうえ筆者作成

の軍が到着する前に光秀の敗北がわかったので、元親は土佐に帰陣していた。

お福が明智光秀の筆頭家老斉藤利三の子と知れば、秀吉は彼女を生かしてはおかなかったであろう。お福は元親の土佐に8年ほど極秘に匿われていた。この時、長宗我部元親が匿わなければ、3代将軍徳川家光は誕生していなかったに違いない。これも歴史の重要なターニングポイントである。

その後、豊臣秀吉が死んだことにより元親は彼女を内密に匿う必要が無くなった。元親の妻お由は、お福を実家の石谷家の親戚筋にあたる京都三条西家に猶子として出した。京の三条西家は摂関家に次ぐ格式の高い公家で、歌道で天皇に仕えていた。後に春日局とよばれたお福は作法等々をこの三条西家で修得したのである。徳川家康も当然お福の家柄、書道・歌道・香道等々において当世一流の女人と見込んで、孫の家光の乳母に択んだのであろう。

5 土佐統一

土佐中央部を統一した長宗我部元親は土佐一国の統一をめざした。敵は今や安芸国虎と一条兼定の二人である。まずは土佐東部を支配する安芸国虎との戦いとなった。安芸氏は昔から5千貫をもつ大豪族である。

安芸国虎は長宗我部元親を挑発するかのように領内に侵入を繰り返していた。そこで元親は先手を打って安芸方の馬ノ上城を占拠した。

「殿、安芸国虎はまず馬ノ上城の奪回にくるでしょう」

と宿将の有賀藤兵衛が口を切った。

小十郎は、

「吉良氏・津野氏等々土佐中央部の国衆との戦いで兵も疲れております。ここは、国虎殿に使者を送り同盟を結ばれたらいかがでしょうか」

と進言した。

「わしも兵の消耗は避けたい。平和裏に国虎殿が我に従ってくれれば戦いは避けられる。すぐに使者を発てるがよい」

と命じた。ところがである。

安芸国虎は、

「元親め。我に頭を下げろと言わんばかりの口上、本山を討ったことでのぼせ上がったか」

と怒りを露わにして使者を追い返した。こうなっては両者の激突は避けられない。元親は宿将たちを集めこのように言い放った。

「安芸国虎は、こちらが丁重に和を求めたにも関わらず使者を追い返し、いまだにわが領内に侵入を繰り返している。そして、わが領内の罪もない民を殺戮し、婦女子を犯し、農作物を奪っておる。このような非道はこの元親絶対に許すことはできない。この度、安芸国虎を討ち、傲慢な安芸氏を抹殺する。全軍、神の化身となって討伐する準備をせよ」

長宗我部元親の軍勢七千。これに対し安芸国虎勢は二千であった。そして、すぐに軍議が開かれた。

「殿、わが香長平野と安芸平野の間には山が海に迫っております。やっと軍馬が一列で進軍できる幅だけの道しかございませぬ。敵領内のことゆえ山から攻撃されれば兵力に勝るといえども苦戦を強いられます」

「安芸国虎は穴内・新庄に前線部

隊を配置致し、わが軍が海岸線の狭い道を進軍するのを山麓の要所で衝く作戦でありましょう」
と宿将が言った。元親は、
「敵の大将は誰か」
「黒岩越前でございます」
この男安芸では剛の者と言われる勇者である。元親は、
「ここは、我が兵の消耗を避けるため我が軍を二手に分ける。そして、敵の兵を分散させ一気に穴内と新庄を突破しようと思うが重臣の各々方はいかがお考えか」
　元親は当主ではあるが強引に命令を下すのではなく宿将たちの合議を重んじた。各宿将もそれが最前の策であろうと賛同した。
「兄者、兵を二手に分けるのはよいが、何分敵領内の山中を行軍するのは困難を極めます。まず、敵の武将を調略し先導させねばなりませぬ」
と弟である香曽我部親泰（国親3男）が進言した。元親は、
「その役目そなたに任せる。そなたは領国が安芸と接しており敵の武将も知っておろう」
香曽我部親泰は、
「早急に使者を送ります」
と引き受けた。目星があったのであろう。
　時は戦国の世、圧倒的に勢いのある長宗我部元親に寝返る武将が続々と安芸国虎から離反してきた。横山紀伊、岡林将監、専光寺右馬允、小谷左近右衛門等々である。彼らは元親に認められようと、積極的に山中を行軍する長宗我部別働隊の先導を買って出た。戦う前から安芸氏の軍団はこのように内部崩壊していたのである。
　穴内・新庄を護っていた黒岩越前は、元親の思惑どおり長宗我部の隊が背後に回ったと思い兵を分け半数を山中の別働隊にあたらせた。元親は手薄になった新庄城に総攻撃をかけた。黒岩隊は支えきれず安芸城に逃げ込んだ。そして安芸国虎は籠城策をとった。弟の親泰は、
「ここは総攻撃で一気に国虎を仕留めましょう」
と進言した。元親は兵の消耗を考え強行な攻撃を避けた。思惑どおり安芸国虎は兵糧、弾薬が尽き家臣の救済を条件に降伏してきた。元親は

図表5　安芸攻防戦

出所:各種資料参考のうえ筆者作成

この条件を受け入れた。安芸国虎は自刃し安芸氏はここに滅亡した。

土佐統一のために残るは、土佐西部を支配する一条氏のみとなったのである。しかし、元親には一条氏を討伐するのにはためらいがあった。それは父国親を育て、長宗我部を再び復活させてくれたのは、土佐一条氏の2代一条房家公である。この父祖以来の大恩ある一条氏を討伐することは、代が変われどもとてもできることではなかった。

この時、父国親より長宗我部に重臣として仕えてくれた近藤甚左衛門が、病に倒れ死の床に就いていた。元親は甚左衛門を見舞った。

「甚左しっかりせい。わしにとって甚左は父のようなものだ。わしをもっと支えてくれ」と懇願した。甚左衛門は、

「殿、長年のご恩有難く存じます。殿が一条家の討伐を躊躇われているとのこと」

「そうなのだ。そなたも存じておろうが一条家には恩がある」

と元親はいった。甚左衛門は、

「一条氏を討伐なされ。今の当主一条兼定は一条家の血をひいておりませぬ。先代の一条房基殿の内室と執政の堀川康政が通じ、その間に生まれたのが今の当主兼定でございます。先代の房基殿もこのこと知らず亡くなられました」

元親にとっては衝撃的な事実であった。

「甚左、それは誠か」

と念を押した。

「この甚左衛門、死に際に偽りなど申しません」

そして、その夜眠るように息を引き取った。吉良家を継いだ実弟親貞が、

「兄者、一条家3代房冬様も4代房基様もその死について家中で疑いを抱いておる者があったとの風聞を耳にしたことがあります。また、一条家の領内の公文書もすべて執政の康政名で発せられておると言われております。一条家の血を受け継いでおらぬ兼定なら討伐いたしましょう」

と進言してきた。

一条家と領国を接している元親の3男親忠は高岡の豪族津野氏を継いでいた。吾川郡を治める実弟の吉良親貞と高岡郡を治める親忠は、元親の許可が無いがままに幡多郡に進攻した。

元親は賽がふられたと覚悟し、一条家を乗取ったとも言える兼定を討伐することにした。

まず、元親は調略により一条家の分断を目論んだ。一条兼定は昼夜を問わず酒、女に溺れ、家老の土井宗珊や昔からの忠臣の諫言にまったく耳をかさないどころか、命を張って諫言した家老の土井を手討ちにしたのである。ここにきて、一条家の重臣の安並、羽生、為松がクーデターを断行した。一条兼定を妻の実家である豊後の大友宗麟へ追放したのである。

重臣は兼定の子内政を元親のもとに送り、長宗我部に服属した。実に前関白一条教房の来国より、7代130年間の一条氏の治世は終焉をむかえたのであった。これで土佐は長宗我部元親により完全に統一されたのである。

6 四国制覇 ～取材後記～

元親は土佐国は統一したが四国は制覇した。「制覇」と「統一」には少し違いがある。

「統一」は基本的には旧国衆を追い出したり殺したりして、自分の家臣を新領主に据えることである。しかし、元親はそれをしていない。阿波、讃岐、伊予について、当時、反長宗我部勢力は点在しており、それらを完全に攻略しているわけではない。あくまで抵抗する国衆は攻略しているが、同盟関係が成立すれば既存の国衆にそのまま統治権を与えている。

これは、織田信長などの攻略方法とは全く異にするものである。信長、秀吉、家康は旧国主支持派の残党たちの復讐を恐れ、旧国主は殺しその親族ともども皆殺しにしている場合が多い。

長宗我部元親が四国を「制覇」できたのは、強力な軍事力を背景としたその外交手腕であったと言ってもよい。元親自身の兄弟や子など一族の者を入婿させたり、国衆の長はそのままにして家老などに家臣を送り込み、広範に同盟関係を構築する手法をとった。

彼が阿波の和佐氏、四宮氏。讃岐の香川氏、伊予の金子氏と同盟関係を結んでいたことが資料で確認されている。そして、彼らが他の国衆と争いになった時には、長宗我部氏の軍事力で制圧するという覚書を同盟関係にある国衆に発給している。

四国の覇者　長宗我部元親

土佐統一 ―姫若子から鬼若子へ―

現代の日米の安全保障条約のようなものであったと思われる。

また、長宗我部元親は同盟関係のある国衆には低姿勢で接している。例えば、伊予の有力国衆の金子元宅に対する書状にも、敬語が頻繁に出てくる。

これは、同盟者に敬意を払っていた証拠である。戦国時代において強者が遜(へりくだ)ることは例え同盟者と言えど力のバランスというものがあり、他ではあまり例をみない。

ここで、元親が人を惹きつける逸話を紹介しよう。

伊予の国衆の金子元宅が、長宗我部側として豊臣秀吉と戦い、高尾城で戦死している。元親は幼い次男毘沙門(びしゃもん)丸に、金子氏の名跡(みょうせき)を継がせお家を存続させている。また、元親が豊臣秀吉との戦いで負けて降伏した後も、伊予、讃岐、阿波の自分に味方した国衆に土佐に領地を与え保護している。

その後、関ケ原合戦(1600)の前年、長宗我部元親が病死した。徳川家康と元親はお互い懇意にしていた。もう一年元親が生きながらえていたとしたら、長宗我部氏は東軍に味方し、お家存続していたであろう。4男である盛親にとって降って湧いた跡目相続で天下の情勢がわからずして西軍の誘いに乗ってしまったのである。結果、長宗我部氏はお家取りつぶしとなってしまった。その後に山内氏が掛川5万石から土佐25万石の新領主として入封した。家臣の少ない山内氏は長宗我部氏の家臣を下級官吏として召し抱えた。こうして土佐藩独特の「上士」「下士」という身分制度ができあがった。今でも高知では山内氏より長宗我部氏を支持する県民は多い。判官びいきである。

幕末の土佐の討幕軍の多くの兵士の先祖を辿(たど)ると長宗我部氏の家来が大変多く含まれていた。坂本龍馬、中岡慎太郎、武市半平太等々も長宗我部氏の旧家臣である。

長宗我部氏の土佐での人気は圧倒的である。その由縁を高知の呑み屋で地元の人に聴いてみたが、大半の人々から発せられた言葉は、長宗我部元親は「律儀第一の人」、「慇懃(いんぎん)の人」という言葉であった。私は取材を通して、圧倒的人気の由縁に納得した。

参考文献

・「長宗我部氏の研究」
津野倫明著　吉川弘文館

・「長宗我部元親と四国」
津野倫明著　吉川弘文館

・「長宗我部元親」
荒川法勝著　PHP文庫

・「長宗我部元親」
宮地佐一郎著　学陽文庫

・歴史群像「長宗我部元親」　学研

・「長宗我部」
長宗我部友親著　文春文庫

・「長宗我部元親」
山本大著　新人物文庫

(2017.2.1)

OKB総研　特命研究員　三矢 昭夫

▲長宗我部元親が出陣時戦勝祈願した若宮八幡神社

▲長宗我部元親公の墓